



こどもの広場 代表 横山眞佐子 さん

青少年の文化の向上と普及に貢献したとして「久留島武彦文化賞」を受賞。市内幸町にある児童書専門店「こどもの広場」の代表横山眞佐子さんをご紹介します。



▲「ブックトーク中、大人も子どもも同じような表情になるんです」と横山さん。撮影：吉岡一生氏

守りたい

絵本の文化を

居心地のいい空間で

こどもの広場創業

1979年に児童書専門店「こどもの広場」を始めた横山さん。創業したきっかけは、子どもたちをサポートできる仕事をしたいと思い、何ができるかを考えていた時、新聞で児童書専門店を始めたという記事を見つけたことでした。

「当時は、児童書専門店は珍しく、絵本の文化もありませんでした。大変なこともありましたが、周囲の方々に助けていただきました。まだ1人でお店を営んでいた時に入院することになったのですが、

お客さまが話し合ってお店を守ってくださいました」

お店から広がる活動

「いつも新鮮な体験ができません」とお店のスタッフの室田さんも話すように、面白いことが大好きな横山さんはお店を軸に、さまざまな取り組みを行ってきました。

下関市立美術館で開催された絵本の原画展もその一つです。「始めた頃はまだ絵本は美術作品として扱われていなかったんです。下関市立美術館は先進的でした」

このほか、各地の小中学校へ出向き、本の内容の一部を紹介して好奇心を引き出す「ブックトーク」と図書室に置く本を子どもたち自身が選ぶ「選書会」も行ってきました。





まちかどボイス

今月のテーマ
新年の抱負！



▶2019年下関市立美術館で開催された特別展「横山眞佐子と3人のゆかいな仲間たち 安野光雅/角野栄子/あべ弘士」で解説をする横山さん。



◀棚の本を並べる順番を考えるスタッフと横山さんと山根さんが絶えません。



▶「絵本は200冊楽しめることを私も周りの子どもたちに伝えていきます」と山根さん(右)。

「選書会に持参する本はスタッフと一緒に選びます。スタッフの協力なしではできません」と横山さんが話すと、「自分が子どもの時にも選書会があったら良かったのに」とスタッフの杉永さんは笑います。

2011年の東日本大震災の時には「ブックエイド」を行いました。本を寄付する人・売る人・買う人を募り、売上金を使って選書会で選ばれた本を購入、子どもたちが書いたメッセージを本に挟んで石巻市の小学校に届けました。「みんな元気であるかな」と石巻市の小学校から届いた寄せ書きを手に取り、思いを話します。

編集後記

- 道下美里さんが、腹筋などを1日1,000回されていたと伺い「私も！」と思いましたが、全然できていません。今年こそマッチョに！（ひ）
- 明けましておめでとうございます。今年も、市民の皆さんにたくさん市報に登場していただけるよう頑張ります。（き）
- 子どもの頃に読んでいた絵本を久しぶりに読みました。子どもの頃とは違った感動がありました。（と）

人とのつながりを大切に

「子どもの頃に来ていて今は働いています」とスタッフの竹内さんが懐かしそうに話すように、今年42年目を迎えるこの日の広場。取材中來られた昔からのお客さまの山根さんは「絵本は200冊楽しめる本」という横山さんの言葉が忘れられません。一流の画家が絵をつけているので200冊楽しめます。広場は貴重な存在です」と話し、横山さんはその言葉に感謝します。「責任をもって本を選んできました。楽しい責任です。これからも一生の宝になる本を手渡せるような場所でありたいです」